

津田教育会館主催 教育講座

学校はなぜこんなに苦しいのか



講師の鈴木太裕さん

セ香川で津田教育会館主催（香教組後援）の教育講座が行われました。講師は、教育研究家で土佐町議会議員の鈴木大裕さんです。

鈴木さんは、「崩壊するアメリカの公教育－日本への警告」（2016年岩波書店）の著書で、アメリカ公教育の崩壊が日本の現実になると警告を発信しています。学校における息苦しさの正体を教育における「構想」と「実行」の分断という切り口から、私たちがどこに希望を見出だせばよいのかについて話されました。

冒頭で『人新世の「資本論」（斎藤幸平著 集英社新書）』の一部を紹介。

資本主義の発達は、大量生産による利益追求へと人々を導いていったが、それを可能にしたのがこの「構想」と「実行」の分離であった。商品の構想の段階から完成まで、生産過程のすべてを担っていた職人から、構想が取り上げられ、一連の流れであつた彼らの仕事は徹底的に分析、細分化され、誰でもこなせる単純労働へと変貌し、職人は現場裁量だけでなくスキルもプライドも失っていく……。

GIGAスクール構想による一人一端末の配布が進み、企業によってパッケージ化された操

「見便和な教育テクノロジーのイノベーションが、実は教員からスキルを奪い、代替可能な肉体労働へと変えつつある。アメリカでは、1983年『危機に立つ国家』以降、国をあげて教育の合理化と標準化に突き進んできた。

「何のための教育なのか」の定義が変われば「何が良い教えなのか」も再定義される。そして、多くの教員が現場を離れていった。「彼らが教職を離れるのではなく、教師という仕事が彼らを去つていった」のだ。

日本では「働き方改革」の名のもとに、外注化が進んでいる一見、社会から歓迎されそうな「学校雇用シェアリンク」も、見方を変えればコロナ禍と「教員の働き方改革」に便乗した公教育民営化のためのトロイの木馬だ。

部活動の地域移行を論じる前に「まずは国が教職員に謝罪するところからこの議論を始めるべき」「教職員の多忙化は確かに深刻。部活動も持続ではない」「しかし、そもそも教職員の働き方改革と部活動を天秤にかけられることはおかしい」「日本が世界に誇ってきた部活動」なら胸張れるような条件整備を進めれば良い」「スポーツや文化活動は教育基本法が定める『人格の完成』と関係無いはずがない

と言われる日本の教員の働き方改革が叫ばれているが、真に守るべきは、教師というしごとそのものなのではないだろうかと思う。アメリカの研究者（1990年）の言葉を引用し、「激務によつて教員が『燃え尽きる』というバーンアウトだけがクローズアップされ、教育現場における自由裁量のはく奪が教員の疎外感を与えているという構造的な問題が覆い隠されてしまつてゐることは『とても残念』だとつまり、教員の働き方改革を考える上で大事なことは、業務や勤務時間の削減という単純な問題ではない。安易な業務の効率化はさらなる分業と疎外感につながると提起しました。

度考え直す時期に来ている。

最後に、「教育は人生の準備ではなく、人生そのもの」(JOHN DEWEY)の言葉を紹介し、「今求められている問いは、生徒の学びに喜びはあるのか。日本における勝ち組の先に幸せはあるのだろうか」と参加者に問いかかけました。

○ 講演後、参加者と活発な質疑応答が交わされ、充実した講演会になりました。

○ 多忙化の解消について考える機会になった。働き方改革が本質的な解決になつていない現状に衝撃を受けた。「構想」と「実行」の分離の話しが腑に落ちた。教員は技術職だと思う。決められたカリキュラムをその通りに進めるのはなく、ベテランが師匠で新人が弟子という関係を築き、ノウハウやスキルを学ぶ。人を相手にする職業だからこそ人とのかかわりを大切にしたいと思った。「人を育てる学校」が印象に残った。(教員)

○ 素敵な先生に出会うと子どもは伸びます。一人一人違う子どもの得意を伸ばす。そのためには先生がのびのびと楽しく仕事をしていないとダメだと思います。すべては愛じやないかな。国ももつと教育を

作さえ覚えれば、誰でも直ぐに教えられるような授業コンテンツが子どもの教室にすごい勢いで入つて来ている現状から、この斎藤幸平氏の著書と大学院時代に読んだアメリカの研究論文「構想と実行の分離」とつながつたと話します。

「部活動は今日の教育現場にて『構想』と『実行』が分離していない稀有な領域」「怒りの矛先は『部活動』ではなく、部活動を教職員の搾取で成り立たせてきた国に向けるべき」と語りました。

を育てる場所」として再構築することが必要。そのためには、人を育てることと関係ない業務の削減は大切。大人たちがつくった競争的な格差社会を「是」として子どもたちに適応させるのか、「非」として子どもたちにしか創れない新しい社会の実現

- 「実行」の分離と教育は同じ。驚いた！しかし、教師の主体性・自主性が本当に奪われつづかる…。大変だ！教員の多忙化は搾取の結果。今日の話を聞いて、多忙化解消のみを目指してはいけない。教員としての主体性・自主性を失わないようどうすればいいのか。この観点が今まで全くなかった。子どもたちの人格の完成、子どもたちを育てることとを教育の目的であることを忘れず、自分のできることを考えていきたい。（教員）

○ 学童保育にも通じる話だと思つた。（学童保育指導員）

○ もつと自由に働きたいと思つていた気持ちを代弁していたいだいたように思います。ありがとうございます。（教員）

○ 現場を離れて7年目。現職の当時も「そうだったな」と実感した。「多忙化の解消には大きな罠がある」という言葉が強く残つた。教育とは何かを考えいく必要を感じた。



岩波書店
2016年発行

教育雑誌「クレスコ
大月書店note
「先生が先生」な

二

大月書店 note
「先生が先生
中で」

生に

なれない世



